

CIEC 第 54 回研究会（CIEC 生協職員部会関西支部設立集会）報告

日時：2005 年 6 月 11 日（土曜日）

場所：京都工芸繊維大学 総合研究棟 4F 会議室

第 1 部 CIEC 関西支部設立集会（14 時から 15 時）

設立集会挨拶 ～ 京都工芸繊維大学生協理事長 遠藤 久満先生

設立集会挨拶 ～ CIEC 生協職員部会副代表 内赤 尊記（千葉大学生協）

関西支部世話人代表挨拶 ～ 中森 一朗（京都大学生協）

第 2 部 CIEC 第 54 回研究会（CIEC 関西支部設立記念研究会）

CIEC 生協職員部会関西支部への期待 ～ CIEC 副会長 京都大学教授 若林 靖永先生

CIEC 小中高部会からの報告 ～ 滋賀県立水口高校 小西 浩之教諭

生協に期待すること ～ 京都工芸繊維大学 渋谷 雄先生

各生協取り組み報告

1： 京都大学生協 松永 剛士（京都大学情報学研究科 院生）

2： 龍谷大学生協 加藤 由美（生協職員）

3： 兵庫県立大学西部生協（元・姫路工業大学生協） 衛藤 昭二（生協職員）

4： 金沢大学生協 梅原 健次（生協職員）

第 1 部

[遠藤 先生] ～ 生協への大学側からの期待

現在、生協が求められている PC 事業は大学の情報教育授業の「隙間」を埋める役割だということ。研究者の役割は「新しい研究」。生協の期待されていることは研究者が研究に専念できる環境を作ること。つまり生協の役割は大学が行わなくてよい部分、その「隙間」を埋めることなのでは。具体的に言うと現在生協が行っている教材 PC のサポート事業、PC 講座などの展開を大学の代わりに進めていくことが重要な役割になる。生協は安全・安心・安定・安価この 4 点を今後も追及し、大学ともに発展していきたい。

立派な学術組織としての CIEC の中で、純粋に学術的な研究だけではなく、専門外の人も含めた広範な利用者との間に立って PC の利用支援に大きな貢献をしている生協職員の意見交換の場として、CIEC 生協職員部会関西支部の役割に大いに期待したい。

[内赤 氏] ～ CIEC 生協職員部会発足の経過および背景の説明・関西支部と共同でやっていくことへの期待

内赤氏にとっての職員部会は山口代表とのメールでのやり取りの中でも見られるように『私達自身が“学ぶ”ということを楽しみ続けたい』ということ。自分たち職員も成長し続け、

この場（職員部会）において確認していく。この間のわれわれは組合員不在の「ただのモノ売り」であったのではなかったかという反省がある。この生協職員部会という「活動の場」は、ここを通して学生・教職員を中心にする大学、そして地域社会と PC を介して教育そのものを共に考え、連携させコミュニティをつくり、われわれ自身も成長していくそういう場でありつづけたい。

【中森 氏】 ～ 設立趣旨および世話人会メンバーと今後の活動

1：関西の仲間の幅広い交流をめざします。

2：活動目標

- (1) 関西地区の生協職員同士の実践交流を進めます。
- (2) 大学、地域に幅を広げた意見交換を進めます。
- (3) 事例研究を積み重ねた成果の発信を行います。

3：部会活動について ～ 月 1 回程度の部会活動を進め、世話人メンバーを中心に運営を行います。あわせて継続的に情報発信を行い参加の輪を広げます。

4：関西支部部員について ～ 顧問を若林先生にお願いし、呼びかけ人に加えて 6 月 11 日までの参画者が支部設立時点での部員として活動を開始します。

5：実施組織について ～ CIEC 生協職員部会関西支部 代表 中森一朗 とします。

CIEC 生協職員部会関西支部世話人会のメンバー

中森 一朗（京都大学生協） 小野田 陵二（京都大学生協） 松下 貴彦（立命館大学生協） 加藤 由美（龍谷大学生協） 小國 幸子（滋賀医科大学生協） 羽賀省二（大阪樟蔭大学生協） 沢口 龍治（京都事業連合） 大石 恵子（京都事業連合） 小林 完（京都事業連合） 植田 泰史（大阪事業連合） 関口 昌宏（神戸事業連合） 坂口 辰彦（金沢大学生協） 大久保 厚（連合会）



第二部

【若林 先生】 ～ CIEC 生協職員部会関西支部への期待

大学生協の運動・活動の中から生まれてきた組織である CIEC。そして、さまざまな部会が生まれ、今日生協職員部会ができた。これをきっかけにさらに今後 CIEC の活動が豊かに発展してほしいと願う。

大学生協ができた当初は「食」と「本」を中心に取り組んできた。これの現代版として、コンピューターが台頭してきた。つまり「PC」という新しい取り組みが大学生協の中に加わったと



いうこと。初期のコンピューターMS-DOSは作業処理の道具でありコミュニケーションの手段ではなかったがMACの出現により自己を確立できるツールとなったことに注目しよう。しかしあくまでもPCは「道具」だということを理解しなければならない。大学教育のあり方が問われている現在、コンピューターの限界をしっかりと見据え、授業のあり方、生徒との接し方など「人との関係、心の交流」を見直していかなければならない。CIECの最初の出発点はPCを介して人を豊かに育てるということだった。CIECという「場」が提供されることにより、学生・教職員・生協職員・地域社会がより元気になってほしいと願う。最後に私の「思い」としてはPCCの関西版を共同の企画としてやりたいです。

【小西教諭】 ～ 小中高部会の取り組み

活動方針…「新しい教育の創造」

今までになかった教科「情報」が出現「子供の学びとコンピューター」と「情報化社会の中の子供たち」を中心的な方針とし、活動目標として以下の3点を重点化。

- 1) コンピューター利用教育の原点、教科学習(2単位)におけるコンピューターの利用の向上を図る
- 2) 総合的な学習の時間の研究を進める。
- 3) テクノロジーの進展(ex.携帯の普及)に対する教育活動の質的な変化を探る。常に変化を遂げている情報機器を知り、それらを活用した先進的事例報告を行う。

【渋谷先生】 ～ もっとコミュニケーションを重視したサポートを！

担当している1年生の「情報リテラシー演習」では、大学生活においてコンピュータを円滑に活用できるコンピュータリテラシー能力の育成を目的としている。また、文具のように日常的に使うことを目標とし、必要な機能と性能を備えながらも携帯可能な科目推薦PCを生協を通じて紹介しており、例年、入学者約120名のうち60～70%程度の学生が利用している。このPCに関するトラブルなどのサポートを生協で受け持ってもらっているが、直してもらっても「なぜ直ったか」ということを学生が理解できていない場合が多い。われわれ教える側が求めるのは生協のスタッフはただ単に直すだけではなく、もっと学生に「なぜおかしくなったか」、「どこを直したか」を教えてやってほしい。こういった、コミュニケーションを通して、いずれは学生自身で問題を解決できることを期待している。生協側スタッフにもっと「教育する場」として意識を持ってほしいということである。

【松永氏】 ～ 2005年度オリジナルPC購入者向け講座

京大生協では2002年度より学部入学者(100人強)向けにセットアップ講習会をいっせいに実施していたが、個人間のスキルの差が大きくなり「教えるということ」に関しても限界を感じていた。生協・学生・親・大学の4者の思いがいままで、まとめきれずおらずすべてに関して満足度の低いものとなっていた。そこで2005年度より方針を、5.6人の班による少人数・グループ学習形式の「課題解決型講座」に変更した。まだ3回しか行っていないがこれにより、スタッフからは

- ・受講生の意識の向上
- ・主体的に取り組む学生の増加
- ・ディスカッションの活発化

など、前向きな感想が寄せられている。

ただ、改善すべき点として、大学とのカリキュラムとの調整・受講者のスキルの把握・スタッフの育成・スキルアップなど3点が挙げられる。

[加藤氏] ～ 新入生パソコン講習会 in 龍谷大学瀬田学舎

2003年：この年の新学期PCはただパソコンを売っていただけだった。他大学の取り組みを聞いて来年は何か取り組みをやりたいと思っていた。

2004年：業者（ヒューマンアカデミー）にお任せの講習会…大量在庫を残し失敗に終わる

2005年：学生が考え、学生が講師をする学生参加の講習会を企画

新入生は言葉だけでは分らない子も上級生と一緒に作業をすることで問題が解決できるようになったり、昨年までには見られない「よかった」という感想が多くよせられた。

講師をしてくれた上級生達も初心者に教える難しさを知り、同時に教える楽しさもわかり、自分がした行為で「喜んでもらえる」感動も味わった。

今後の生協の課題は大学側との講義内容の調整。講座のプログラムの工夫と、幅広い層の講師を増やし、同時にスキルアップも含めての対応をしていくことである。



[衛藤氏] ～ 教材パソコンの取り組みについて

8年目の取り組み。8年前は100台くらいの利用だったが今年は入学者の40%、450人が利用。大学の教諭と打ち合わせしカスタマイズしたものを提供。

今後の課題：1) 現在無料で講習会行っているが有料化し内容の充実したものにしていきたいと思っている 2) 就職支援。PCを利用しての提案 3) ワイヤレスLANの活用～大学との調整

[梅原氏] ～ 2005年度新学期PCの取り組み

昨年実績 278台 今年度 366台 講習会つき。「動産保険」「講習会」「学内でサポートが受けられる」「みんな同じPCを持っている」…本人の不安の解消よりも父母の不安の解消が販売につながった。

今後の課題： 来年のパソコンの必携化にたいする準備。 来年1800人の新入生に対応しなければならない。現在の13名のスタッフでは無理。これからどうするか準備していかなければいけない。